名所物見の旅 - 其の四拾六 剱岳

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

今夏、映画「剱岳・点の記」が話題になっている。明治四十年（1907）、日本地図の空白部を埋める為、陸軍参謀本部陸地測量部の柴崎芳太郎らが苦難の末に剱岳登頂を果たし、四等三角点を設置して測量に成功するという物語である。点の記とは陸地測量部（現・国土地理院）に永久保存されている三角測量の記録資料である。

木村大作監督は本物にこだわったというだけに、日本アルプス三千メートル峰の現場の映像が中心となっていて、長年この山域に通っている私には時間をかけて撮影していることがよく分かった。今流行りのコンピュータグラフィックスを多用した映画とは一線を画す、フィルムによる迫真の映像であることに間違いなく、満足いくものだった。

信頼厚い山案内人・宇部長次郎

この映画の原作は新田次郎の同名小説で、三十年ぐらい前に読んだ記憶がある。また実際のいきさつは山岳関係書では有名なことなので、内容に関して驚きはなかったが、大山村和田の山案内人・宇治長次郎を演じた香川照之に感銘を覚えた。もちろん以前から実力に定評のある役者であるが、今回の役柄にぴったりの素晴らしい風貌と人柄を醸し出していた。実際の長次郎とは似ていないのだが、木版画家吉田博が描く山の猟師そのまま。まさに明治時代の山の人を体現していた。無類の吉田博ファンであったCFAY前副司令官ランキスト中佐に、香川演じる長次郎を見せてあげたいくらいだった。

剱岳を眺める第一級の展望台・別山で出会った修験者と剱岳の雄姿。この修験者は立山連峰をはじめ、全国の霊山を登り歩いているということだった。「剱は山体の色がとても素晴らしい」と緑の濃淡織り交ぜた色彩に輝く剱岳に見入っていた。

長次郎は測量隊と剱岳に登頂した二年後の明治四十二年には越中の山岳愛好家グループ、吉田孫四郎、石崎光搖（青年画家）ら四人と案内三人の計七人で剱岳に再び立っている。その際石崎らは登路の三ノ沢を長次郎谷と名づけたのである。長次郎はその後も冠松次郎の黒部川探索行のほとんどに同行するなど、黎明期の日本登山史に大きな足跡を残している。

測量隊の活躍

剱岳は最後に残された未登頂の高峰として陸地測量部や発足したばかりの日本山岳会が登頂可能ルートを探っていたのだが、映画で描かれたような小島烏水らとの熾烈な初登頂競争があったわけではない。

剱岳に登頂する現在の一般ルートは別山尾根から登るもので、今では何箇所かの鎖場のお蔭で簡単に登れるようになっているが、一箇所やっかいな場所があって、もし固定された鎖がなければ登攀用具なしでの突破は難しい。測量隊は結局このルートをあきらめている。剱岳冬山登山の代表的コースである長大な早月尾根も頂上直下の岩場が難関となる。測量隊が登頂した三ノ沢（長次郎谷）は現在一般コースではないが、長い雪渓を登り切れば頂上までの岩場は一番登りやすいものである。

映画では測量官の柴崎芳太郎らが第一登したことになっているが、実際には柴崎は測夫の生田信（のぶ）に命じて登路を探らせ、7月12日（*注）に生田は長次郎らと登頂に成功した。7月28日には長次郎の案内で柴崎と測夫の木山竹吉らが第二登を果たし、仮設の四等三角点を設置した。三等三角点設置の為の標石や覘標用資材を担ぎ上げられず、やむを得ず自然木に板を打ちつけて岩と縄で固定しただけの四等三角点設置となった。柴崎は生田が剱岳登山の第一回目だったことを、四年後に山岳雑誌に載せている。柴崎らの目的はあくまで測量であり、剱岳のルートを探りながらも付近の山々に三等三角点を設置し測量しているので、測量部としての初登頂のこだわりはあっても、柴崎自身の個人的な初登頂に対するこだわりはなかったようにみえる。

生田らは第一回の登頂の際、剱岳山頂で錫丈の頭部や鉄剣と焚き火の痕跡を発見し、未踏峰ではなかったことを知る。錫丈は鑑定の結果、奈良末期から平安初期の作と見られている。私は中学生の頃、千年以上も昔に剱岳は修験者によってすでに登られていたというこのエピソードを知って、とても驚いた覚えがある。

（*注）：当時の富山日報には7月13日登頂と報じられているが、新田次郎は明治40年の天気図を調べて第一回登頂は梅雨の中休みで晴れ上がった12日と推定している。残念ながら陸地測量部の「点の記」は一等から三等までの三角点の記録なので、四等三角点となった剱岳についての記録は残されていない。柴崎自身は山岳雑誌に富山日報の記事は誤りが多いと指摘しているが、本人による登頂日についての記述はない。したがって登頂の日付は推測の域を出ないが、私は新田説を採ることにした。

明治42年、石崎光搖が撮影した剱岳登頂の記念写真。2年前に柴崎芳太郎ら陸地測量部が立てた櫓が残っている。

測量官と測夫

陸地測量部の測量官（測量手と呼ばれる）は陸軍参謀本部に所属し、武官の下に配属される文官で、競争率は50～60倍以上といわれていた。山形県大石田町出身の柴崎芳太郎は小学校を卒業後、丁稚奉公しながらも勉学に励み、十九歳の時に陸軍の台湾守備隊に入隊して、軍曹累進後の二十七歳の時に転じて陸地測量部に難関を突破して合格。剱岳登頂時は三十歳であった。また測夫とは測量官の助手を務める人達で、測量の手伝いをはじめ、覘標（測量用櫓）作り、人夫の手配、荷物担ぎまであらゆる仕事をこなして測量作業を陰で支え、新たな測量のたびに雇用され終了時に解雇されるという身分であった。農家の次男三男坊が多かったようで、生田は静岡県川根村、木山は鳥取県東伯郡の出身。

厳冬期の剱岳。この季節は常に雪崩の危険が付き纏い、尾根筋を攻めるしか登頂の方法はない。室堂乗越にて。

剱岳標高の変遷

私が子供の頃、剱岳の標高は3,003mとして地図に記載されていた。ところが昭和43年（1968）突如2,998mと訂正された。航空写真により修整されたとのことであった。柴崎らの測量値は2,998mであったので、昭和5年に3,003mに変更された値が間違っていたことになる。

2004年、剱岳測量100周年記念事業の一環として新たに三等三角点の標石が埋設され、GPS測定により最高点の標高は2,998.6mと確認された。記念すべき2007年に発行された最新の地図には、四捨五入されて2,999mと表示されている。

孤高の名峰・剱岳を眺める絶好の展望台

日本アルプス第一級の峻嶺・剱岳を眺める展望台として、まず第一に別山を挙げることが出来る。立山から北に延びた稜線上に位置する別山からの剱岳は、朝から日没までいろいろな光の角度により陰影や色彩を変え、気品さえ漂う重厚な山容は一日中眺めていても飽きることがない。

ついで別山乗越から下った剱沢のテント場から眺める剱岳も素晴らしい。特に朝夕は仰ぎ見るアルプスの高峰といった雰囲気がある。

さらに剱沢を延々と下り、二股から池ノ平や仙人池へ登り返すと、そこは裏剱と呼ばれる一帯で、剱岳八ツ峰の尖鋭な岩峰が日本離れした風景を見せている。特に秋の裏剱は大変美しく、池ノ平や仙人池の紅葉を前景とした剱岳を見ようと毎年十月初旬は大変な賑わいである。裏剱はどこから登っても往復に三～四日は必要で、この奥深さが魅力のひとつになっている。

立山・剱周辺の思い出の人達

立山・剱の山域に通いだして三十五年。友人が小屋番をしていた関係で、あちこちの山小屋に紹介されてお世話になり、また定宿としている馴染みの温泉宿もあるので、数えてみたらこの周辺で私はすでに八十泊を越える滞在をしていた。

私が泊まった山小屋の主たちは芦峅寺出身の人がほとんどで、多くが佐伯姓、ついで志鷹姓を名乗っている。今ではあまり感じなくなったが、昔は芦峅寺特有の言葉で喋られると、なにやら叱られているようで戸惑った覚えがある。共通して寡黙で実直な人が多く、気がよい山小屋の親父さんらは行けば必ず歓待してくれ、時には自宅にまで招待されてご馳走に預かったこともあった。また親父さんらは例外なく恐妻家で、どの小屋もカカア天下であった。親父さんは宿泊料を安くしてやろうとするのだが、常に奥方の顔色を窺いながらのことで、こちらとしては気が引けて遠慮するのが常だった。最近は足が遠のいているが、「剱岳・点の記」を見て、久しぶりにこの山域に訪れようかと計画中である。

吉田博が描く山の猟師。香川照之はこういった明治時代の山の人の雰囲気を存分に醸し出していた。

お　知　ら　せ

メインゲート右側歩道橋からウッドデッキに続く歩行者専用ゲートが新スマートゲート設置工事のため、8月3日（月）より27日（木）まで閉鎖されます。
通勤等にご利用されている方々には工事期間中大変ご不便をおかけしますが、ご理解のほどよろしくお願い致します。